

新婦人しんぶん

新日本婦人の会目的

- ☆核戦争の危険から女性と子どもの生命をまもりまします。
- ☆憲法改悪に反対、軍国主義復活を阻止します。
- ☆生活の向上、女性の権利、子どものしあわせのために力をあわせまします。
- ☆日本の独立と民主主義、女性の解放をちとります。
- ☆世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和をうちたてまします。

今週の紙面

- 2面 女性ニュース
- 3面 読者のページ/まんが/俳句
- 4面 年金相談/女性史/人「性」いろいろ/韓国から
- 5面 憲法/ホット
- 6面 スマホ小組/もう一品/母の歴史
- 7面 新婦人のページ/主張/北京+25



札幌市 高際洋子

新日本婦人の会は国連に認証されたNGOです

ジョン・レノンとオノ・ヨーコ 「イマジジン」に込めたもの

ザ・ビートルズの元メンバー、ジョン・レノンの死後40年以上たった今も世界中で歌われている「イマジジン」。歌に込められたメッセージを、生前のジョンと親交のあった音楽評論家の湯川れい子さんに聞きました。

衝撃だった最初の一行

「イマジジン」は、常に世界のどこかで起きてきた紛争やテロなどの対立に、「この世界は私たちがイメーシすることで作られている。私たちがそのイメーシを変えたら、世界は変えられるんだ」と歌っています。みんなひとつのこの空の下で、等しく平和に楽しく暮らすことを夢見ながら、今日という日を一生懸命送っている兄妹なんだよというメッセージが多くの人に響いて、いま新型コロナウイルスとたたかっている世界中でも歌われているのでしょ。

1971年に発表された当時、最初の一行、「Imagine there's no Heaven (天国はない)って想像してごらん」は、ものすごい衝撃を持って受け止められました。もし、「地獄なんてない」って

湯川れい子さんに聞く

東洋的な自然観

言われたら、ああそうだよなあとなるかもしれないが、天国だと「じゃあ神様ってなんなんだ？」となりますよね。キリスト教やイスラム教など神というものを絶対として育ってきた人たちにとっては、日本人には想像がつかないほどの、いきなり頭をかなづちでたたかれたくらいショックでした。

ジョンが「イマジジン」を作ったのは、日本人で前衛アーティストのオノ・ヨーコさんと68年に出会って、2年間一緒に暮らし、日常のなかでの彼女の影響を如実に自覚していた頃です。ビートルズの解散後、ジョンのソロアルバムの中の一曲として作られました。長い間、ジョンの作品として発表されてきましたが、今、共作者としてヨーコの名前が並んでいます。イマジジンという言葉そのものも含めて、ヨーコが存在がとも大きかった、西洋人の自分の自然観で書ける曲じゃなかったという、ジョンの遺志からでした。あの曲は、東洋と西洋、女と男、労働者階級と貴族階級、

根っからの平和主義

そんなひんぱんな交流があったわけではないのですが、ジョンとヨーコのアルバム「ダブル・ファンタジー」(80年)が大ヒットして、次の「ミルク・アンド・ハニー」を作っているときに、ニューヨークのスタジオに、ニューヨークのスタジオに電話をかけて、電話口のジョンと話したのが最後になります。亡くなる4日前でした。最初にビートルズで来日したときは、人懐っこいポール・マッカートニーとは違って、なかなか親しく話してくる感じではなかったですね。少し遠くの方に離れて佇んでいたり、冷やかかな皮肉屋さんという雰囲気の人でした。

ヨーコと結婚して何度か来日し、軽井沢などで過ごすようになって77年、78年ごろにお会いしているのですが、そのころのジョンは本当に穏やかで、そのまま作業を着て歩いていたら、日本の風景のなかに溶け込みそうな人でした。当時、ジョンは音楽活動から離れて、息子のショーンの子育てに専念していました。私は「子育ても素晴らしいけど、私



1936年東京都生まれ。音楽評論家。エルヴィス・プレスリー、ザ・ビートルズを日本に広め、洋楽評論・解説者として第一線を走り続ける。ラジオDJや作詞家としても活躍。「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」の共同呼びかけ人。



多くのファンが訪れた「ダブル・ファンタジー ジョン・アンド・ヨーコ」展 (東京 20年10月~21年2月)

たちはずっとあなたの音楽を待っているの。いつ作ってくれるの？」と実際に聞いたことがありません。そのときに「僕は3分間のロックンロールの歌なんかいつだってすぐに作れる。だけど、子どもを育てるといふのはもっと芸術的な作業なんだよ」と言われたんです。そのころ、流行っていた子ども用のゲームについても「人が傷ついて倒れても、その人の痛みを感じるより点数が上がる快感の方を覚えてしまおう。こんな危険なゲームを子どもにはさせないでくれ。やがて戦争で平気で弾が撃てる人間になる」とジョンに言われて、本当にそうだなと思いました。

